

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 127 号

平成24年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（6）

第18講 神の義（2）

それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこには何らの差別もない。
(ロマ書3:22)

イエス・キリストが所有し給う忠実

〔ロマ書第3章〕22節前半は、口語訳では「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」と訳されていますが、原語では、この「よる」という前置詞、すなわち、英語の「by」とか「through」に当たる前置詞と、それに続いて「イエス・キリストの信仰」と書いてあるだけです。「イエス・キリストの信仰」と言えば、いつも言っているとおり、「の（of）」という前置詞は、主格の意味を表わす場合にも使われるし、また目的格を表わす場合にも使われます。例を挙げますと、「英語の勉強」と言えば「英語を勉強する」という目的格の意味ですし、「英語の力」と言えば「英語が持っている力」という主格の意味になります。すなわち「の」という前置詞は、主格にもなるし、また目的格にもなる。そして、口語訳聖書では、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」と、目的格の意味に訳しています。しかし、私はこの訳をとりません。私は、これを「イエス・

キリストが所有し給う信仰による神の義」と、主格の意味に訳したい。この解釈は、...我々の祖先、すなわち、仏教浄土門の恵心や法然、親鸞の信仰をもってこの箇所を読めば、それを信仰と読む以上は、「イエス・キリストが所有し給う信仰」と、イエス・キリストを主格に読まねばならないことが分かるのです。これは私の勝手な解釈や説ではありません。恵心や法然、親鸞の信仰をもって読めば、このように読まなければいけない。これは、語学の力の問題ではありません。信仰の問題です。私は、恵心僧都の信仰によりまして、ここを「イエス・キリストが所有し給う信仰」と、主格に解釈します。

さらに、「信仰」という字は、言語では、「忠実」という意味もあります。これは、信仰とも訳せますし、忠実とも訳せます。ですから「イエス・キリストが所有し給う忠実」とも訳せます。そして、この「イエス・キリストが所有し給う忠実」とは、イエスが一生涯神に忠実であられ、十字架を負うて贖いを成就して復活されたのですから、「イエス・キリストが成し遂げられた十字架の贖罪に至る忠実」であります。ですから、これを端的に解釈すれば、「イエス・キリストの信仰」、「イエス・キリストの忠実」は、「イエス・キリストの十字架の贖いを」を意味することになります。すなわち「イエス・キリストの持ち給う信仰による神の義」とは、「イエス・キリストの贖いによる神の義」の意味であります。...このように訳すことによって、神の義はイエス・キリストの贖いによって完成されていますから、さらにこれに加えて、我々人間側の信仰をも必要とするというように、誤った解釈を防ぐのに役立つことになります。

(P.159)

聖書の東洋風の味読的な読み方

内村先生がこの3章22節の講義の時にお述べになった言葉を参考までに引用して、先生のお考えを紹介したいと思います。

「ロマ書3章21 - 26節は、僅かに6節より成る所であるが、其中に福音の真髓が教へられて居るとして有名である。然るに何故か文辞あまりに簡単である。パウロが若し之を引き伸ばして長い論文となし置かば、研究者に取りてはまことに幸いであるのに、不幸にも意地わるしと思はるるほど簡潔である。何故に斯く彼は重大な真理を短く云ふたのであるか。彼は恩恵の救ひを説く前に当然の順序として万人の皆罪あるを強調した。彼は疾く救ひを説き度きに、逸る心を抑えつつして厭わしき罪の姿を画いていたのであろう。そして、いよいよそれを画き終へて、律法の行によりては一人も義とせられぬことを結論として述べ終わるや、茲に今まで支へられ居りし大水が俄に堤を破りて流れ出づるが如く、心の中にはちきれんとする恩恵の言辞が決河の勢いを以て迸り出たのであろう。故に委しき説明をする余裕などなく、あたかも久し振りにて遇いし親友間の語の如く、論理的脈絡に頓着せずして、きれぎれに甲より乙、乙より丙と真理がほとぼしり出たのであろう。故に言は短くして、意は長い。文法的にまたは論理的には不十分にして而も偉大なる言である。これは深くパウロの心の中まで穿入して初めて解し得る語である。西洋風の論理的の見方よりも東洋風の味読的な方法が此の際役立つのである。」と。以上で分かる通り、内村先生のお考えは、私の考え方とまったく一致しています。ここは、学者のようにガチガチと理詰めにやる方法よりも、一見大局からパッと解釈する方がよいであろうと内村先生は言われて、私の見方に賛成しておられる。...私は前講で述べた「律法、道德と無関係に」という内村先生の言葉によって、信仰が確立しました。今日学びました、(1) イエス・キリストの贖いによる神の義、(2) すべて受ける者に、信じる者に向かっている、(3) またそれには何らの区別もないという、この三つの真理のどれか一つでも分かったならば、我々の信仰は確立します。祈る、今日のこれらの真理のうちどれか一つが、諸君の心を捉えん事を！

(P.166)

第 19 講 神の義 (3)

ロマ書 3 章 23 , 24 節が最も大切

聖書の中で最も重要な部分がロマ書である事は、学者の間でも異論がないと思います。そして、そのロマ書の中で最も大切な部分はロマ書第 8 章であると主張する学者もいますけれども、私は、素人ではありますが、ロマ書の中で最も大切な部分は 3 章 21 - 26 節であり、そして、その最も大切な部分の中でも、本日学びます 3 章 23 , 24 節、これがロマ書のものであると、この両節さえ残れば聖書の他のすべての聖句がなくなってもかまわないと思う程に、重大な箇所であると思います。その理由は、この両節は、我々が何を信ずべきか、すなわち、我々が信ずべき信仰の客体の全部が、明瞭に書きあらわされている箇所であるからであります。この箇所は、ロマ書の中で最も大切な部分でありますから、原語の順に従って、書き直して見ます。

23 節「そのわけは、すべての人が罪を犯したから、それゆえ神の栄光に達せず、」

24 節「常に義とせられつつ、賜物として、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって」

内村先生も、このように原語の順にお書きになりました。この箇所の訳は、語学の力にはよりません。語学の力がどんなに弱いものでも、こういう訳になります。はっきりとしています。

(P. 169)

常に義とせられつつ

〔24 節は〕口語訳では、「彼らは、値なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」となっていますが、原語は「常に義とせられつつ」となっています。原語は、受動態動詞の現在分詞形ですから、「常に義とせられつつ」と訳す以外に、他の訳し方はありません。ただの一語であります。実に、宇宙的な重さを持つ言葉です。これが福音の中心的思想を言い表す言葉で、これを信授するかしないかで、我々が救われるか、滅亡するかが決まるのであります。ところで、この「常に義とせられつつ」という句がどこに掛かるのか...と言いますと、それは「イエス・キリストによる贖いによって」という最後の句にかかります。すなわち「イエス・キリストの贖いによって、常に義とせられつつ」となるのであります。

すなわち、我々は、我々の行いに寄らず、我々の信仰にもよらず、「我々の」と付く何物にもよらずして、ひとえに「キリスト・イエスにある贖いによって」、我々は「常に義とせられつつ」復活の朝にまで至るのであります。これをクリスチャンという。ですから、「キリスト・イエスにある贖いによって」というこの聖句は、「常に義とせられつつ」という聖句と同じ重さがあります。その理由は、「常に義とせられつつ」生き得る唯一の原因は、「キリスト・イエスによる贖いによる」からであります。「ただひとえにキリスト・イエスにある贖いによって、常に義とせられつつ復活の朝にまで至る」というのが、我々クリスチャンが信ずべき信仰の客体、第 2 の真理です。これが、パウロがロマ書 3 章 21 節から 8 章 39 節までにおいて詳しく説いている信仰（個人の救い）の要約であります。

(P.171)

「贖い」とは

彼らは、値なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって義とされるのである。(ロマ書 3.24)

「贖い」とは、イエスが十字架にかかって、我々の身代わりになって、すべての罪を処分して下さり、我々に永遠の生命を与えて下さったことを言います。この永遠の生命というものは、イエス・キリストの贖いにより、常に義とせられつつ、賜物として、神の恵みとして与えられるものであって、人間の側では何もする必要はありません。全部が恵みであります。イエス・キリストの贖いによって、神の恩恵として、賜物として、この永遠の生命を受けることを信仰という。この真理を真受けにして、「そうか」と受け取ることを、信仰によって救われるという。

すでに申し上げたように、この 23 節は、1 章 18 節から 3 章 20 節までにおいてパウロが述べた「万人罪人の真理」の要約であります。またこの 24 節は、3 章 21 節から 8 章 39 節まで似てパウロが展開する「贖罪の真理」と「復活の真理」の要約であります。そしてさらに、この 24 節は、23 節を暗黙のうちに含んでいると見ることができますから、実に、この 3 章 24 節こそは、1 章から 8 章までの要約とみてよろしい。誠にこの 24 節は、全宇宙的な重みを持つ聖句であるというべきであります。

(P.172)

ぎょうせん

仰瞻教と称名教

諸君！この2節の原語訳をよく見て下さい。この23, 24節の中には、「信仰」という字がないでしょう。君たちは「自分は信仰が浅い、薄い」などと言って、この信仰という言葉で引っかかっている。しかし、それは大間違いです。人間側の信仰を必要としない！人間の善行を必要としないのと同様に、人間の信仰も必要としません。ストレプトマイシンは、それを飲みさえすればよい。これは簡単です。万人が往けます。ここには、受け方の区別もありません。すなわち、信仰の浅い深い、長い短いの区別はありません。我々クリスチャンは、ひとえに贖いにより、賜物として、恩恵により、常に義とせられつつ、復活するのであります。内村先生は、自分のキリスト教は主を仰ぎ見る「仰瞻教」であると仰せになりました。私は、ロマ書10章13節にあるように、「我が主イエスよ」と主の名を呼ぶ「称名教」だと申しております。...

ヨハネは、「イエスを神の子キリストと信じる者が、すべて永遠の生命を得るためである」(ヨハネ伝3章15節)と説明していますが、このイエスを神の子と信じるとはどういうことかと言えば、「贖いにより、常に義とせられつつ生きると信じる」ことであると、パウロは説明しました。即ちヨハネが言う「イエスを神の子キリストと信じる」とは、パウロのこの「義とせられつつ」という3章24節を信じるのと同じこととあります。...

そもそも、人に善いことをする、愛をもって人に対して善行をする、これだけでは宗教とは言えません。...善行をして、人を苦しみから助けること、これは道徳であって、宗教ではありません。宗教とは、人間の理性や経験では理解できない、これらを超えた深い霊的真理を信じて、その信仰の結果、魂が砕けて、朽ちない永遠の生命を頂いて、平安な心をもって、自己に打ち克つ力を頂いて善行をすること、これが宗教であります。そして、キリスト教で深い霊的真理を信じるという場合のその真理とは、この23, 24節、この2節の内容のこととあります。(P.173)

ロマ書の真理は、我々には外国語

ロマ書の真理は、我々には外国語です。人間の考えでは理解できません。我々人間には興味がない。だから、教会から家に帰って来た途端に、我々はすぐそれを忘れてしまうのです。家に帰れば、ご飯を炊いたり、雑用をしたり、歌人に「けしからん」等と文句を言ったりしているうちに、それをすぐに忘れてしまう。そうですから、我々は、外国語を勉強するように、毎日これらの真理をくり返し学ぶ必要がある。外国語は、放っておいたらすぐ忘れてしまいます。

仏教浄土門では、浄土門の福音とも言うべき御経の文句を善導大師が 48 文字で解釈なさいましたが、法然上人は「この 48 文字は本願の肝なり、目なり、魂なり。常に目にもあて、心にも思い、口にも言え」と言われました。また法然上人は、「信じても信ずべきは乃至十念の詞、たのみてもたのむべきは必得往生の文なり」と言われた。この法然上人のお言葉を借りて言えば、「ロマ書 3 章 24 節は福音の肝なり、目なり、魂なり。これを常に目にもあて、心にも思い、口にも称えようではないか。信じても信ずべきは『常に義とせられつつ』の詞であり、たのみてもたのむべきは『賜物として、神の恩恵により、キリスト・イエスによる贖いによりて』の文句である」となります。

これは外国語的真理であって、いつもこの世にへばりついて「俺が俺が」と言っているようでは、なかなか分からない真理であります。こと程左様に、我々は徹頭徹尾この世のものに執着しています。すなわち、我々の心は曲がってしまっています。ですから、この 3 章 24 節だけで結構ですから、法然上人が言われたように、我々は、この真理を常に目にも当て、口にも言い、心にも思う必要があります。私は、この世のものが欲しい。しかし、聖書の真理はこれです。聖書を学ぶという以上は、この真理を学ぶ必要があります。

(P.175)